

市中に水車を以て燈油を製造するは、此の油車と、犀川下の元車と、淺野川の水車との三ヶ所なりしかど、文政二年より石川郡松任等の郡地に製造する事と成る。依りて金澤市中の製造は、三ヶ所の油車共に停止せられしと也。故に夫れより後は城内用も松任油を買上げられたり。按ずるに、燈油は維新前は茶種油のみなりしが、三壺記に、元和二年の頃野田道右手の野原に油木數十本植ゑさせられ、三つ屋の在所に土藏を立て、木の實を取入れ、御城中の燈油に用之。と見え、淺野川卯辰山の麓なる油木山にも、むかし城内用の油木を植置きたりと傳説もあり。されば元和・寛永の頃は木の實油をば城内の燈油にも用ひられしと聞ゆ。寛永十四年三月十八日堂形雜穀藏納定書に、八石荏油、二十五石菜種。とあり。此の時代頃より茶種油をば用ひられしにや。寛文八年十一月他國出產物定書に、油並油種は三ヶ國共會て他國へ出し申間敷、他國より來る分は何程にても入津可申付。とありて、此の後々までも舊藩中は、茶種油および菜種は他國出をば停止せり。

○油屋與助傳

衆之を見聞して甚だ落膽し、遂に一戰に討負け、河合宣久を初め魁首有名の者共悉く戰死せり。宣久が男河合右京亮虎春死を遁れ、後河合藤左衛門と改稱し、石川郡坪野村へ退隱し、法舛して才覺と號す。其の居地を今に才覺屋敷と呼べり。其の子源兵衛松任へ出で、町人と成り、坪野屋源兵衛と名乗り、始めて種油を製造す。其の子を藤左衛門と云ひ、藤左衛門が子は與助也。寛永の頃金澤へ出で、木倉町に居住し、種油を商賣せしが、正保年中岩谷牛右衛門の揚地を賜はり、倉月用水を取入れ、初めて水車を建て、種油を製造す。是金澤市中に於て茶種油を水車にて製造せし起源なり。夫れより代々白元を勤め、城内諸役所用の油を指上げたりといへども、寶曆九年四月の火災に水車悉く燒亡せり。此の時堅町へ移轉し、水車は他人の有と成り、于今連綿す。多田源兵衛は其の後に燈油を商賣となし、城内等の用向を承りしが、今に至り子孫連綿して、世々多田源兵衛と稱し、種油を製造販賣せり。殊に世々仁心厚く、貧民を救恤するを旨となし、或は火難の人を救ふなど世人と異り。按ずるに、所謂積善の餘慶なるか、商業の繁昌

與助は、今の堅町油商多田源兵衛の元祖にて、油車創業の者なり。家譜に云ふ。與助が先祖は多田五郎政晴とて、攝州多田氏の後裔なり。越前の領主朝倉家に仕へ、後加賀國能美郡河合村に來住して、河合藤左衛門宣久と改稱し、其の子右京亮虎春と共に郷士と成り、本願寺の廳下宿老の一入たり。長享元年の頃より加賀の守護富樫家と榊楯に成り、石川郡富樫庄久安村に築城して高尾城を攻め、遂に富樫介政親を殺し、威を加・越に振ふ。享祿二年の春本願寺の家老下間筑前・弟民部少輔加賀に下着し、國務を執るといへども、頗る我が意に任ず。依りて宣久等の宿老申合せ、能州へ退去し、畠山家に屬し、下間の黨を討たんと援を越前朝倉家へ乞ふ。之に依りて同四年八月朝倉宗滴大軍を率ゐ、加賀國へ發向せらる。畠山も宗滴を迎へ、敵を挟み討ちにせんとて、一族畠山大隅等を隊將となし、老臣遊佐美作・神保出羽・溫井備中及び河合宣久・洲崎慶覺坊・英田光濟寺等を始めとして、加賀國河北郡津幡まで發向せしに、下間方謀計を回らし、味方討死の首級共を拾ひ集め、朝倉方大將分の姓名を書添へ、大野・八田の間に梟す。能登の畠山

他の及ぶ處にあらず。又おもふに、多田氏の元祖源兵衛は松任に居住し、其の孫與助初めて金澤に出で、水車を以て種油を製造す。是金澤水車の起源なりといへども、其の實松任に水車あるを摸したるもの也。松任の水車は、三宅邦の橋園文集に載せたる三宅完典の行狀に、高祖祐專府君。寛永十五年新卜宅地。子孫賴之。前是邑未有水碓。君巧思、始造水車。設機碓。邑人賴其利。乃推稱以車爲稱號。とあり。されば三宅邦が高祖なるもの、寛永十五年に松任の居宅に水車を初めて創立し、水碓を此の水車に設けたり。故に屋號をば世人車屋と呼べりと。是當國にて水車機碓を設くる事の濫觴ならんか。然れば油屋多田源兵衛の祖與助が、正保年間に金澤市中に水車を建て、機碓を以て種油を製造したるは、是松任車屋の水車に摸擬せしものなるべし。又多田の舊傳に、元祖與助以來の舊記類および家祖河合藤左衛門入道才覺着料の具足・刀劍等の武器を傳來せしかど、そのかみ油車の居宅に土藏なかりしゆゑ、近邊なる栗田傳兵衛の土藏へ預け置きけるに、寶曆九年四月の火災に右土藏へ火入り、舊記・武器悉く燒失すといひ傳へた